

書評

浜崎正規著『近代経済学の方法と理論』

岡崎 不二男

私の場合、何かをまとめるにあたって、*「はしがき」*ないしそれに類するものは、本論完成後に書くのが常である。私にとつてはこの方が、内容を最もコンパクトにまとめ易いからであるが、もっと正直に云えば、*「はしがき」*から書いてみても、本文完成後に、一種の公約違反を犯すような破目におちいるおそれが多分にあるからだ。

自分の仕方がこうだからという勝手な理由から出発して、浜崎氏の著書を拝見するにあたって、まず、*「はしがき」*によって同氏の意図の少くともりんかくを予め把握できようと期待していた。ところが私のすばらな期待は、たちどころにくつがえされたことを告白せざるを得ない。なぜならば、*「はしがき」*の大部分は、著書の、経済学に対する一般的な見解を示

唆することにあてられており、この著書をまとめられるに当たつての企図については、近代経済学の『理論を学史的立場で位置づける』という、極めて簡潔な表現に止められているからである。少くとも何らかの使命感を抱いて読みはじめの読者に、最後迄興味と期待を続けさせるためには、これは甚だ巧妙な方法であることに気付いたのは、私が全十章と補論二編を通読した後であつた。

この書物の内容は、極めて多彩である。いま仮に目次について見るだけでも、章のタイトルにおいては、主として近代経済学史を論ずるに当つて当然言及さるべき学派が、節のタイトルにおいては主として、主要な学者ないしその主要業績が、ほとんど網羅されている。われわれはまず、著者の構想

と意気ごみに敬意を表さなければならぬ。

浜崎氏は、第一章『経済学史研究方法論序説』において、氏がとられた学史的研究所の姿勢をまず定めている。ここでは、学史的研究所の方法論ないしさまざまな学史にみられる類型に關する、シムムベーター、E・ハイマン、杉本栄一ら三氏の所説を引用検討した上で、浜崎氏自身のとられるところが示されている。それは、私の理解する限りではこうである。すなわち、杉本氏の云われる第二の型——「著者が唯一の正しい経済理論と考える理論の立場に立ち、過去の経済学史はこの唯一の真理に向つて自己展開してきたものであるとみる」型の学史——の立場に立ちつつも、シムムベーター的な経済社会学の視点に立つことによって、杉本氏の云われる第三の型——「経済理論と歴史とはたがい有機的に関連しているという根本的な考え方から、それぞれの経済学説をそれが生いたった社会全体としての歴史状況に照応させて理解する」型の学史——で云うような意味での歴史性を浮き彫りにし、これによって経済学の歴史を明らかにすることが、浜崎氏の学史的な方法と受けとられる（二九頁参照）。

第二の型の学説史は、経済理論の内蔵する論理の自己展開

の過程を、学説史家が正しいと信ずる理論から意味づけることに重点をおき、第三の型は、経済学説をその歴史的背景の発展との対応の中で意味づけることに重点を置くものと思われる。この限りでは二つの方法は、われわれに多分に択一的選択を迫る位置におかれている。したがって兩者の単純な折衷は無論不可能である。浜崎氏の方法論上の苦心はまさにこの点にあったものと推察される。ここにおいて浜崎氏の方法では、『シムムベーター的な経済社会学の視点に立つこと』によって、本来は択一的な位置におかれた二つの方法を、同時に採用可能ならしめるという配慮が加えられている。択一的な関係を両立的な関係に変換する論理に対して、どのような呼称を与えるかといった詮索は、全く無用のこととしておこう。われわれの興味は、そのようにして定立された方法が、一つの学説史として結実する結果に向けられるべきである。このような関心をもつものにとつて、興味の焦点はまず、近代経済学の「近代性」を、浜崎氏がどのように説明されるかに向けられるであろう。

この問題は、第五章、特にその第一節において扱われている。氏は、第四章迄に検討された諸学派に対する近代経済学

について、それが一体なににむかって『みずからを転換させようとするのか』を自問され(一〇二頁)、さらに近代経済学における主観主義価値論の思想的背景を述べたりえ(一〇三―一〇四頁)、一八七〇年以前とは別に、メンガー、ワルラス、ジエボンス等を、近代経済学の創造者と見なす理由として、主観的価値論の外に、限界概念・均衡概念・弾力性概念などの分析用具を使用することを指摘し、『およそ近代経済理論の「近代性」なるものはなにもまして分析用具そのものにもとめなければならぬ』こと(一〇四頁)さらに、『「近代性」はまさに経済学の方法の上で経済科学としての立場が厳密に反省されることによって、経済をめぐる法則性の認識に以前と異った新しい方法が導入されたところにみいださねばならない』、とされている。

近代経済学のみに見られる分析装置によって、近代経済学を他から区別する限りにおいては、誰しも異論をさしはさむ余地のない議論である。しかし、近代経済学を他から区別する標識を明らかにすることは、そのような標識を具えていることが近代的であることを明らかにすることは別であるように思うのは私だけであろうか。私の理解する限りでは、浜

崎氏の方法論は、理論の自己展開過程の追跡が、社会思想的視点を媒介として、理論の歴史的背景の発展と対応せしめられることによって、学史的な意味づけを行うことのように思われる。氏独自の的方法論によって、近代経済学のみ認められる幾つかの標識が、なにゆえに近代的なのかを明らかにされない限り、近代経済学の近代性とは、単に新しいということと同義になり兼ねないのではあるまいか。

第六章以下においては、近代経済学における分析装置の特徴である限界分析および一般均衡理論の発展過程から、進んで初期動学理論、新古典学派を経て、ケインズならびにポスト・ケインジアンの一部の理論の特徴が、主として、理論の自己展開の過程に重点をおいて説かれている。この間に主要なものだけでも、メンガー、ジエヴォンス、ウィーザー、ボーム・バヴェルク、ワルラス、パレート、シユムペーター、ウィクセル、カッセル、ミユルダール、マーシャル、ピグー、ケインズ、ハンセル、ハロッドから、サムエルソン、ヒックス等の理論がとりあげられている。著者の視点にとつて重要なそれぞれの理論が、簡潔に説明されて居り、多少の冗長さを辛抱してでも近代経済学のハレードを見たいと思う者

は、著者によってかぶりつきの席に招待される仕組になつて
いる。もっともこの間の所説については、

(1)第七章『一般均衡理論の展開』において、ワルラス一般均
衡体系の着想に関する簡単な説明に続いて、シュムペータ
ーの経済発展理論が論ぜられているが、一般均衡論そのも
のは、シュムペーターの中で行方不明となつている点、

(2)第八章『北欧学派と動学理論』の冒頭において、ウィクセ
ルの経済学に関心をもつた動機が、『社会主義者ウィクセ
ルの立場でなくて、マルサスの主張をより重要だと考える
立場』であつた旨の指摘がありながら、学史の書物として
は当然そのような判断をくだす根拠に言及すべきではない
かという点、

(3)ケインズが『総供給函数と総需要函数とが等しくなる可能
性は、資本主義の発展につれてますますすくなくなる』と
主張したと表現される点（二一〇頁）、

(4)サムエルソンの乗数と加速度の混合体系における、一様収
斂・収斂振動・発散振動・一様発散の判定基準を解説する
にあたって、著者の犯された誤謬、

等については、著者に再考を御願ひしなければならぬので

はなかるうか。

ところで、第六章以下の内容は、浜崎氏が馬場啓之助氏に
従つて、近代経済学の三つの課題は、その発展過程が(i)限界
効用説の提唱にはじまりワルラスやマーシャルの均衡理論の
体系が形成されるまでの純粹経済学の時期、(ii)ウィクセルか
らケインズにいたる経済変動論の時期、(iii)ケインズ以後の長
期動態論の時期、の三段階分割に形象化されることを承認し
た上で、これらの課題に沿つて、近代経済学説が展開されて
きた跡づけを行ったものと云えよう（一〇一―一頁）。このこと
と、著者があらかじめ第一章で定められた方法論とは、全く
コンシステントであろうか。馬場氏の所論に沿つた議論の展
開は、直ちに、第一章に掲げられた方法論に忠実でありうる
であろうか。馬場氏の方法に従ふことは、近代経済学の発展
を、論理の自己展開の過程として捉へること即、近代経済学
史を書くこと、という立場を採ることになるのではなかるう
か。いわゆる学史研究家でない私が、ここで何れの方法が正
しいのかについて判断を下す資格はない。しかし、いわゆる
近代経済学に今日見られる動向の幾つかを、思いのままに選
び出して注目した場合、論理の内在的な自己発展が、かつて

近代経済学を識別するための基準を、著しく無力化した事実はおおむねよくないように思われる。たとえばレオン・テイエフ・システムは、ワルラス的一般均衡の現代版であると同時に、アクティヴィティ・アナリシスの特殊分野として見る限りにおいては、線型経済学に属する。このことは、レオン・テイエフ・システムが一般均衡理論の発展という歴史につながることを意味すると同時に、他面、それからの結論が限界分析の結論と対応可能だという結果論は別として、限界分析の抛棄を意味している。また、計量経済学は、実証的研究方法としては、記述統計学のみに依拠した実証的研究方法の発展の歴史につながると云えても、推測統計学に依拠する点——この重要な特徴を浜崎氏は看過されているようである——（二三三頁）——では、社会科学的方法の認識に関して全く新しい方法に立つとも云えよう。これらの事実に思いをいたすとき、近代経済学史の方法について、再び模索の出発点に連れ戻された感を禁じ得ない。

（初版一九六三年四月、新訂版一九六四年四月、玄文社刊）